

185. 絨毛性腫瘍の診療における Scintigraphy の意義

神戸大学 産婦人科

田中 実 川口 吉永 保科 貢

山下 澄雄 東條 伸平

同 放射線科

前田 知穂 井上 善夫

研究目的：

絨毛腫瘍の診断ならびにその化学療法における腫瘍の態様を具体的に把握し、個々の症例について常に適確なる治療を遂行するため、angiography における異常所見を計量化し、客観的に評価する目的で scintigraphy の応用を検討した。

方法：

^{99m}Tc 8 mGi を正確に curie meter で測定してから腹大動脈に注入し、4000hole collimeter を装置した scinticamera で骨盤腔における RI 動態をとらえる。これを A-D 変換器にて digital 量にかえた matrix として videotape に収録し、再生時異常部位に split area を設定してその RI 量を computer 処理にて連続記録し

検討した。

結果：

絨毛性腫瘍における scintigraphy の所見は angiography のそれに同調するものであって、RI 注入にて腸骨動脈出現のあと、子宮動脈から子宮内の異常が RI hot な所見で示され、これは angiography での pooling 像に相当する phase を経て消褪していく。この異常所見の RI 動態曲線は明らかな曲率を有する 2 つ以上の phase で構成されていることが判り、他方絨毛性腫瘍の存在しない子宮での RI 動態曲線には曲率を見出せなかった。

次に絨毛性腫瘍の化学療法に際して腫瘍の態様を angiography とともに scintigraphy の RI 動態曲線より検討すれば個々の症例について合理的な治療が容易になることを実証した。

結論：

絨毛性腫瘍の診療に関し、Scintigraphy による異常部位の計量的検索が angiography の形態学的所見のうらずけとして、特に化学療法の効果判定に有用であることを知った。